

## 古河電気工業(株) アナリスト・機関投資家向けテレカンファレンス 質疑応答録 (要旨)

日時：2018年8月1日(水) 17:30-18:30

内容：2018年度 第1四半期決算

説明者：取締役 兼 執行役員専務 財務・調達本部長 荻原 弘之

Q：光ファイバ・ケーブルの出荷状況はどうか

A：光ファイバはグローバルで好調。Q1の出荷数量は前年度比+14%程度で、北米は+4%、南米、ロシア、アジアパシフィックの伸びが大きい。中国は微減。

光ケーブルについては、ケーブル価格は少し下落傾向があるのは確かだが、当社の場合、品種構成の差によりQ1は利益率が低くなっている。

Q：伸銅製品の在庫調整というのはどういうことか？

A：エレクトロニクス関係の中でもスマートフォン関連が弱かった。今後の伸びは期待できると見ており、それ以外の純銅製品も下期は受注が伸びるとみている。

Q：Q1は減益の情報通信ソリューション事業は、Q2以降どうやって挽回しようとしているのか

A：光ファイバ全体の需要が強いという見方は変えていない。国内のファイバも増益で、需要が強いのは確か。北米については、当社顧客からの需要の戻りは当初の予想より時間がかかっているが、すでに受注済の大口の案件もあり、Q3、Q4と徐々に出荷も進んでくるとみている。新しい統括部門長を筆頭にグローバルマネジメントの強化を進めており、新規顧客取り込みを図っていく。例えば、ヨーロッパでの細径ケーブル等差別化商品の売り込みにも注力する。

Q：エネルギーインフラ事業は、Q2以降どのように改善していこうとしているのか

A：Q1赤字が大きかったのは、国内案件がほとんど入っていないため。下期は、OFケーブルの張替えや民需など具体的な案件があり、売上にきちんと結びつけられるとみている。なお、新エネルギー案件の契約は条件の詰めに時間がかかっており、契約時期は年度内としか申し上げられない。この新エネルギー案件の損失引当▲15億円を含めても、年度見通し▲30億円(の赤字に抑えること)は可能とみている。

Q：北米光ケーブルの遅れの状況は。また、ITLA以外の光部品が増えているということだが

A：ケーブルは想定より回復が遅れているが、情報通信事業全体ではほぼ想定通りなので他の事業がカバーしている。光部品は、アンブデバイス用の光源等が増えていることもあり、光部品事業全体では盛り返せると思っている。

Q：機能製品セグメントの状況、特に銅箔と、半導体製造用テープの状況はどうか？

A：銅箔事業については、電池用、回路用ともに需要は強く、国内、台湾拠点ともに増益。半導体用製造テープは競合からの浸食はあるものの、Q3頃までは現状の水準を維持できるのではないかとみている。

Q：為替感応度はドルベースで1円の変動に対して約4億円とのことだが、通期もその想定どおりと考えていいか？

A：為替の感応度が一番高いのは情報通信。Q1は想定レート（105円）よりも4円円安にも関わらず、当初見通し通りの着地だった。実質的には目標に対し少し弱いということ。

Q：インフラセグメント以外のセグメントについてはQ2以降どのような見通しか？

A：自動車部品・電池についてはワイヤハーネスが好調。一方で、電池事業の出足が遅く、今年はより下期型になると思う。電装エレクトロニクス材料も、純銅製品が下期から増えるとみている。機能製品は、概ねこのままの状況が続くとみており、競争の激しい半導体製造用テープも、Q3までは強いのではないかという印象を持っている。

Q：北米ケーブルの回復が遅れている理由は？

また、光部品については価格競争が激しくなっているという話も聞かすが、どういう状況か

A：ケーブルについては、お客様のM&Aや統合などが背景にある模様。

ITLAについては、次世代品は既存品に比べると値段も下がるが、収益予想には織り込んでいる。

以上